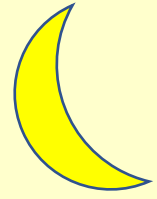


詩人としての出発 『ソライロノハナ』



萩原朔太郎は 1886 年 11 月 1 日、群馬県前橋市に生まれました。1 日（朔日）生まれであることから朔太郎と名付けられました。開業医をしていた父・密蔵と母・ケイのもとで育ちます。

小学校時代は周囲になじめず、読書や楽器に親しみました。朔太郎の文学への目覚めは中学校時代のことです。大阪から来ていた従兄の栄次から短歌の手ほどきを受けた朔太郎は、与謝野晶子の『みだれ髪』との出会いもあり、歌作をはじめます。晶子とその夫・与謝野寛が主宰していた雑誌「明星」などに短歌を投稿しています。

一方で、落第や高等学校への入退学を繰り返し、学業を続けることを断念します。1913 年、これまでの短歌を自筆の歌集『ソライロノハナ』にまとめますが、創作活動はやがて短歌から詩作へと移り、北原白秋主宰の雑誌「朱鸞」に詩が掲載されます。詩人としての道を歩みはじめたこの頃の作品は、詩集『純情小曲集』（1925 年、新潮社）前半の「愛憐詩篇」に収録されています。

若き身のわれが奏づるマンドリン／ちろちろちろと鳴くが哀しき（歌集『ソライロノハナ』より）